

SAPPORO 教区 NEWS

第25号

2017年8月15日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10

Tel. 011-241-2785 / ホームページ：http://www.csd.or.jp

マリア様の取り次ぎと平和を願って～今年も平和旬間開催～

平和祈願ミサ 2017年8月15日（火）18：00～
北一条教会にて

平和行進 2017年8月15日（火）19：10～
北一条教会から大通公園



2016年9月4日に開催された『札幌教区百周年記念式典』をもって、『札幌教区百周年の年』が閉幕しました。札幌教区として独立してから100年となる2015年4月13日から1年半にわたり、教区長である勝谷司教の呼びかけをうけて各地区で取り組み、将来への提言を取りまとめました。それから1年近くがたとうとしている今、わたしたちの提言に対して勝谷司教がどのような訓話を述べられたのかを、あらためて振り返ってみましょう。そして、いま取り組んでいることがイエスの

望まれていることかどうかを考えていきたいと思います。

「教区百周年式典訓話」
教区百周年を祝い、第2世紀の始まりの年を今日、皆さんと祝うことができることを心から嬉しく思います。

遠くからお越しいただいた司教様方、各修道会の代表の方々をはじめ、全道各地からこの会場へお集まりいただいたみなさんに感謝いたします。また、この日の典礼とともに祝う全道の小教区の皆さんにも、喜びのメッセージとともに祝福を送ります。

札幌教区の新たな百年に向けて

イエス・キリストのみ旨を証しするために
一人ひとりが今できることを実践していきましよう

先程、札幌教区第二世紀に向けて、教区内各地区から、報告と提言をいただきました。この提言を依頼した目的は、単なる現状報告や課題の羅列ではなく、明日につながる具体的な提言をいただくことです。

つまり、教会内外の動きを把握し、識別するなかから、未来に向けての具体的な取り組みを信徒全員で共有し、支援実行していくためのものなのです。

教皇様は次のように言っておられます。

「宣教を中心とした司牧では『いつもこうしてきた』という安易な司牧基準を捨てなければなりません。皆さん是非、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すという課題に対して、大胆かつ創造的であってください。目標を掲げても、達成のための適切な手段の探求を共同体が行わなければ、単なる夢に終わってしまいます」（フランススコ教皇使徒的勧告「福音の喜び」33）」

そして、多くの貴重な提

言をいただきました。特に、印象深いのは「建物と共同体」にかかわる提言です。「建物に頼らない共同体とは」という問いかけは、高齢化と信徒数の減少によって、建物としての教会を維持することが困難になってきている中、建物がなくなっても生き生きとした宣教する教会共同体をそこに保ち続けるためにはどうしたら良いかを問うものでした。その先の小教区の統廃合も視野に入れたものです。

しかし、旭川の4教会ではあえて小教区を存続させる決断をし、その為に小教区を活性化するための具体的な方策を数多く打ち出しました。そして、本気でそれを実践しようとしています。そこに教会が変わりつつある兆しを感じ取ることが出来ます。

同様に、静内の共同体の例も、あえて建物を維持する選択をすることによって、思わぬ方向へ神が導いてくださっている例でしょう。これらは、「建物に頼らない共同体」というある意味、建物を撤収したうえで共同体をどう維持活性化するかというマイナスからの発想の問いかけに対して、建物を考えうる限りの

方法をもつて神の為に利用することによって維持しようとする別の方向への気づきを与えてくれます。すなわち教会堂をその地域の信仰のシンボルとし、宣教の拠点として活用するという本来の宣教の在り方への回帰が、信者数に関係なく現状でもできることの証しと受け止めることができま

す。また、釧路地区や苫小牧地区そして北見地区からなされた報告にあるように外国籍の人々とのかわりの中に、未来の教会のヒントと希望を見出すことができず。外国籍の方々の存在は、私たちの硬直した教会観を変え、大きく広げる可能性を秘めています。たとえ短期の滞在であり、転入手続きをしていなくても、彼らが日本人と同じ小教区民であることを忘れてはなりません。日本の教会は「日本人の教会」という意味ではないのです。

また、どの地区よりも信徒の少ない北見地区がどの地区よりも多い信徒の奉仕者を任命していることも興味深いことです。これは「洗礼を受けた一人一人が宣教師なのです」（福音の喜び120）と言われた教皇様の言葉を実現するものです。教

皇様はこうも言われています。「だから資格のあるものだけがそれを進め、残りの信者はこれを受け取るだけと考える福音宣教の図式は適当ではありません。新しい福音宣教は、洗礼を受けた一人ひとりが主人公であることを意味しなければなりません」（同上）。すべての信者が福音宣教師であることをさらに深め実践していったほしいと思います。

長年、青少年に対する課題も問われ続け、効果的な対応が取れずにいた中で、札幌や函館では、今までの小教区中心の教会組織のかでの活動とは違う新しい形での動きが見られます。組織によらないネットワーク的なつながりを通じた活動やミッションスクールのつながりを通じた青少年活動です。これらも今後どのように展開していくか見守り支援していきたいと考えています。

その他、多くの提言がなされていますがすべてに触れることはできません。しかし、どんな小さな提言も、実践する中から新たな道が開けてくる可能性があります。確かに、これら提言による実践活動がすべて実を結ぶかどうかは分かりませ

ん。無駄な努力だったということになるものもあるでしょう。しかし、何もしないうところからは何も起こりません。また、意外などころから未来への展望を開くうねりが生まれるかもしれません。神は、いつも人間の思惑を超えて働かれるからです。明日に向けてのささやかであっても希望を感じさせてくれる多くの種を植えて育てることによって、そこに神が働かれることを私たちは確信しています。

人間の業は小さなものです。しかし、誰かが始めたその小さな業が、多くの時代を変える力となっていくことを私たちは知っています。私たちの切なる祈りをもってなされる行いに神は必ず応えてくださり、教会の未来を照らしてください。

最後に、提言の終わりになされていた「家庭での祈りの勧めを、私も強く支持します。特にこれから家庭を持つ人々に強く勧めます。信仰の伝達は、組織や知識によってではなく、家庭とそこでの祈りによってなされるものです。特別なことをするように勧めるのではありません。たとえばわずかな時間であっても、夕食前に家族が家庭祭壇に

集まり、一日の感謝と明日への祈りを毎日捧げることが家族の信仰と絆の為に大きな助けとなります。日々、どのように家族のかわりが変化しようとも、たとえ夫婦喧嘩や親子喧嘩の最中であっても、神の前に等しく頭（こうべ）を垂れ、へりくだって口に出される毎日の家族それぞれの祈りは、その時々家族の願いや関心事を皆が共有し神に委ねる明日への祈りとなります。子どもが言葉を理解する前からなされ、十数年、場合によってはそれ以上の年月、日々積み重ねられる祈りの時間は、家族の絆を強め、信仰を育み、かけがえのない家族の心の財産を築き上げることになるでしょう。

教皇様の言葉をもつて終わりにします。「課題は克服するためにあるのです。現実を直視し、しかし喜びを失うことなく、大胆に希望に満ちて献身しましょう。宣教する力を奪われたいようにしまししょう。（福音の喜び109）皆さんの上に神の豊かな祝福がありますように。」

2016年9月4日
札幌教区司教
ベルナルド 勝谷 太治

新たな世紀に向けて 教区百周年記念式典が行われる



らマザーについてのお話

◆第一部
・感謝ミサ
◆第三部
・奏楽（SORA）の演奏
・イースタービレッジ青年の歌と演奏、交流

※奏楽は宮古市とその周辺で演奏のボランティア活動をしている
※イースタービレッジは祐川郁生神父がフィリピンで設立運営している

全道で百周年を祝う式典に参加できなかった人々は、同日同時刻に集まり、同じ感謝ミサを奉げた

9月4日（日）藤学園講堂を会場として、東京教区管区の司教様方をお迎えして、千名以上が集い式典が行われた。

記念式典の内容は、
◆第一部
・百周年の年（2015年4月13日～2016年9月4日）総括と未来への提言がスクリーンに映し出され上杉神父から報告

・勝谷司教から、上記掲載の訓話が述べられる
・マザー・テレサの列聖式と式典が同日であることから、神の愛の宣教師会ジャヤ・マリア東京修道院長か

第二部の感謝ミサは、聖ヨハネ・パウロ二世と聖ファウステイナの聖遺物の安置が行われ、会場一杯の信徒・修道者が謳う入祭の歌の下、司祭団・司教団が入場し感謝ミサが始まった。

拝領の後に、教皇様からのメッセージが岡田武夫東京大司教から読み上げられ閉祭となる。
ハッピーランチ（売上金を神の愛の宣教師会へ寄付）を挟んで、午後からは第三部の奏楽（SORA）の演奏と、イースタービレッジ青年の歌と演奏で、共に楽しい時間を過ごすことができた。

一人ひとりが宣教者であることを認識し、札幌教区の新たな世紀に向けて一歩を踏み出した一日だった。

佐藤助祭の 司祭叙階式

8年ぶりの新教区司祭誕生



パウロ佐藤謙一助祭の司祭叙階式が札幌カテドラル北一条教会で2016年4月29日（金）午前11時から行われた。

当日はみぞれ混じりの天気ながら、400人を超える参列者が札幌教区だけではなく、全国から駆けつけた。札幌教区の神学生のほかにも、神学校生活をもとにした東京・京都・大阪教区からの助祭が叙階式での侍者奉仕を引き受けてくれた。ヨゼフ加藤鐵男神父誕

生から、実に8年ぶりの新司祭誕生となる。

勝谷司教は、司祭となつてこれからの学びとなつていく。神と人にと仕えていくしもべとしてこれからの司祭生活を全うしてもらいたいと述べていた。

佐藤神父の叙階記念カードの言葉は、「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」（ルカ6章21節b）

この言葉を選んだ理由は、自身が両親を失ったときに非常に悲しみに暮れていたが、復活したキリストと出会った体験から、決して一人で生きているのではなく、周りの人々とともに歩んでいることに気づき悲しみから解放された。自身自身がキリストの道具となつて、多くの人を悲しみから喜びに変えていきたいという思いを込めて選んだとのこと。

司祭叙階後、司教館付きとなつて、青少年担当となり、ワールドユースデーの同伴司祭として参加し青年たちに寄り添う役目を担った。札幌地区の典礼担当も担い、司教儀典書にもとづく式長研修に参加され、司教儀式（叙階式、聖香油ミサ）の式長を務めている。

また2016年9月からは月寒教会の助任司祭として主任司祭の祐川神父の指導のもと教会で奉仕。

2017年4月からは教区本部事務局長を任せられ、同時に江別・大麻教会の主任司祭となり、忙しい日々を送っている。

佐久間神学生の 助祭叙階式

パウロ三木佐久間力神学生の助祭叙階式が札幌カテドラル北一条教会教会で、2017年3月20日（月）11時から行われた。

佐久間力助祭は昨年3月19日（土）に祭壇奉仕者に選任されており、この1年の神学校での学びと多くの方々の支えによって、自ら叙階の恵みを受ける決心をされた。

会場には札幌地区だけでなく全道各地から集まり、特に佐久間助祭の出身地区である苫小牧地区では、祝賀会のために、手作りの食べ物を持ち寄りお祝いしていた。

助祭という聖職者となつて神学校での学びもあと半年となった。司祭叙階へ向けて自身の決意を新たにし、皆さんのお祈りと支援

をお願いしたいと語っていた。

「助祭叙階を受けて」

札幌教区神学科4年助祭
パウロ三木 佐久間力

この3月に叙階を受け、今は東京の神学院にて勉強をしながら司祭叙階に向けて励んでおります。

わたしは現在、教会で助祭の役務をこなすようになりましたが、その中で特に喜ばしい瞬間があります。それは、聖体拝領の行列において、未洗礼の方に「祝福」を授けることがあります。その瞬間がわたしにとって聖職者になったこと、いまの自分に託された任務というものを一番意識できる時になっています。



不思議なのですが、その喜びの中でまだキリストの洗礼を受けていないこの人の上にも「キリストが豊かに恵みをくださいますように」と心から願っている自分があります。自分にできる新しい役務があるということとは、それだけで本当に喜ばしいことだと実感しています。さらに司祭になると、ミサを挙行することができるようになると思うと、どれほどの喜びがあるか想像も出来ません。この大きな希望に向かって、残り半年頑張っていけたらと思います。みなさま、お祈りください。

また、ボナヴェントゥラ 義島克哉神学生は次のように語っている。

皆様、いつもお祈りくださいありがとうございます。みなさんに「み言葉」だけでなく「ご聖体」をお届けする役目を仰せつかりました。

先日列福された高山右近は、「たとえ全世界を手に入れても、自分の命（魂）を失ったら、何の得があるか」（マタイ16・26）という「み言葉」を大切にしていきました。私たち一人ひとりもまた、キリストへの信仰を実際に生きるようにと招かれています。

義島神学生の 祭壇奉仕者選任式

ボナヴェントゥラ義島克哉神学生の祭壇奉仕者選任式が3月20日佐久間神学生の助祭叙階式に先立ち行われた。

義島神学生は昨年3月19日（土）に朗読奉仕者に選任されており、神学科の2年間の勉強が終わり祭壇奉仕者に選任され、今は3年目に入り助祭叙階に向けて準備をしている。

選任式の終わりに、皆さんのお祈りと支援をお願い

このようにイエス様は、ご自分の「み言葉」と「ご聖体」で私たちを養い支えてくださいます。その手足となつて誠実に働いて行く所存です。みなさん、今後ともよろしくおねがいします。

主の平和のうちに。

青年の活動報告

2017年フィリピン エクスポージャー報告

2017年1月4日から12日までフィリピン・ミンダナオ島のキダパワン市にある児童養護施設イースタービレッジで高校生を対象としたフィリピンエクスポージャー（フィリピン体験）が行われました。参加者の感想と写真をフルカラーの報告書として各教区にお送りしましたが、その中から抜粋してあらためて報告いたします。

参加者は、高校生5人、司祭1人、青年1人が同行。イースタービレッジでのプログラムは次の通りです。

1月5日（木）敷地案内／ヤシの実とバナナ取り／市内説明／歓迎ミサ／自己紹介

1月6日（金）フィリピン文化紹介（ゲーム、食べ物など）／カラオケ大会
1月7日（土）市内観光／街での食事／ゲーム交流
1月8日（日）主日のミサ（主の公現）／プールでの水泳交流／マンゴー食べ放題

1月9日（月）幼稚園のたのみのミサ（主の洗礼）／ドリアンのかき水／職場

見学／キダパワン司教区のホセ・コリン司教との夕食

1月10日（火）BUDOL FIGHT（手でつかんで食べる夕食）／お別れパーティ

■参加者の感想■ 加藤 楓

（当時高校1年生）
今回フィリピン・エクスポージャーに参加した皆さんの貴重な経験をし、多くの大切なことを学び、再確認することが出来ました。教区の皆様、共に参加した仲間、そしてイースタービレッジの人達にとっても感謝しています。

小さい頃から勝谷司教や教会学校の先輩方の話を聞いて参加してみたいと思っていたことが今回このプログラムに参加した理由です。行ったことのない場所に行くのはとても不安でしたが、行ってみてそれらの不安は全て打ち砕かれました。
初日、期待に胸を膨らませながら出発フロアでみんなを待っていました。簡単な自己紹介から色々な話をして

いき、直ぐに仲良くなれました。1時に集合し、2度の乗り換えをしてダバオに着いたのは翌日の6時。クタクタの1日でした。

2日目、ダバオ空港で祐川神父と勝谷司教と合流し現地のレストランで朝食を取りました。そして待ちに待ったイースタービレッジに到着し、やっと休めると思ったのですが、セサーとラミルの案内でイースタービレッジ探検に行くことになりました。テンションも上がり疲れも忘れていたの

でここで休むことは不可能だったと今になって思います。歓迎パーティでは素晴らしい合唱をして貰いとても感動しました。みんな凄く声が綺麗で歌が上手でした。

3日目、この日は夜のプレゼント交換に備え午前中



幼稚園の子どもたちと

レゼント交換に備え午前中に行きました。これは一番の思い出と言っても過言ではありません。祐川神父から日焼けに気を付けるように言われていましたが、対策をしなかったのは最大の後悔です。あまりに楽しかったので詳細は覚えていません。ただ、みんなでプールに落としあいをする日本では絶対にできない遊びをしたのは思い出の一つです。

にショッピングに行きました。インダイのプレゼントを買うことになっていたのですが顔が分からなかったのでセサー、リガン、ガマインに全て選んで貰いました。物価がとて安くハーゲンダッツの特大大パックが日本円で100円以下だったのには驚きました。プレゼント交換でインダイや他のたくさんの人と話すことができたので距離が縮まって行きました。

4日目、この日は予定が無く一日中みんなと遊ぶことが出来ました。みんな折り紙を折ったりフィリピンの遊びを教えて貰ったりしました。顔と名前も一致してきて会話も弾むようになりました。たくさん話しかけてくれたネリサやユミには感謝です。

5日目、みんなでプールに行きました。これは一番の思い出と言っても過言ではありません。祐川神父から日焼けに気を付けるように言われていましたが、対策をしなかったのは最大の後悔です。あまりに楽しかったので詳細は覚えていません。ただ、みんなでプールに落としあいをする日本では絶対にできない遊びをしたのは思い出の一つです。

6日目、この日は珍しく予定がびっちり午前中に幼稚園の子をイースタービレッジのチャペルに招いてのミサとサミーの職場見学やジョリビーというファストフード店に行つて、午後

5日目、みんなでプールに行きました。これは一番の思い出と言っても過言ではありません。祐川神父から日焼けに気を付けるように言われていましたが、対策をしなかったのは最大の後悔です。あまりに楽しかったので詳細は覚えていません。ただ、みんなでプールに落としあいをする日本では絶対にできない遊びをしたのは思い出の一つです。

8日目、遂に別れが来てしまいい食事も喉を通りませんでした。何度もハグをして車に乗り後ろを振り返っても手を振っているのを見ると何か大切なものを失った気がして絶望感がこみ上げてきました。車中はやけに静かでみんな同じ気持ちなのだと気が付きました。

7日目、いよいよお別れパーティの日です。自分達は恋ダンスを披露し、イースタービレッジの人たちの歌の披露で遂に泣いてしまいました。パーティりが終わってもみんな遊んだり、話したりしながら翌日の出発まで一緒に過ごしました。

マニラで一泊し、翌日日本に帰ってきました。振り返ると毎日が楽しく充実していてそれはイースタービレッジの人たちの温かさや優しさ、素直さによるものだったと思います。シャワーが出なかったり、トイレが流れなかったり、洗濯機が使えず、3時間以上洗濯に費やしたり、大変なことたくさんありましたが、そこで日本で当たり前のことが当たり前じゃない、つまり自分たちがいかに恵まれているかということを感じることが出来ました。

日本では見えない部分、それがたくさんあるのだと言ふことを学び、それに気づこうとすることが重要なのだと思いました。

今回、このような貴重な体験を高校生というとても若い段階で経験することができ、とても感謝しています。今回体験したことを忘れず今後には生かして行かなければならないと思います。また、自分を育ててくれた教会の後輩達にこの体

験を伝え、受け継いで貰いたいと思います。
Thank you for a wonderful time at Easter Village.

■担当司祭、佐藤謙一神父の総括■

2017年のフィリピンエクスポージャーが無事に終わってホッとしています。もちろん、高校生をはじめ参加者のみなさんが、今回の旅行を通して素晴らしい体験をされたのをうれしく思います。

2016年のフィリピンエクスポージャーは現地の危険度が増し中止となりました。そのため今年、参加を広く呼びかけましたが5人の参加者にとどまりました。結果的に少人数だったことでよかったです。何とかわたしの目が行き届いたからです。実のところ、わたし自身



Before BUDOL FIGHT
(手づかみで食べる夕食前に)

も初めてのフィリピン行きで少し不安を感じていました。それはフィリピンの治安の悪さを聞いていたことと、わたし自身が英語を自由に話せないことからくるものでした。高校生も引率の青年もそんなに英語が喋れるわけではない。その上、わたしも英語がうまく話せるわけではないという「ないないづくし」の中での出発だったのです。

行きは、新千歳空港から香港経由でマニラに着き、そこからフィリピンの国内線に乗り換えてダバオに行き、イースタービレッジの車でミンダナオまで行くというものです。およそ13時間の旅でした。出発前に何度もシミュレーションを行い、万全の態勢を整えて今回の旅行に臨みましたが、そううまくいくものではありません。何といたってもわたし自身がマニラの入国管理で足止めを食ってしまいました。係員



で、イースタービレッジに到着した時は本当にほっとしました。
今回の参加者みなさんの感想を読んでもみると、イースタービレッジの子どもたちとの触れ合いの中で、心の中に大きなものが残ったことが分かります。日本の日常を離れ、異国の地で子どもたちと話し、遊び、食べ、歌い、過ごした日々がすべて彼らの糧になっていくのです。「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ(ルカ17・21)」という福音の言葉が実現していることを、この6泊7日のイースタービレッジでの生活でわたしも実感しました。
ミンダナオ島情勢が気になる場所ではありますが、今後とも多くの高校生達にイースタービレッジの体験を提供できるように、皆様の祈りと支援をお願いします。

★『NWM(ネットワークミーティング) in 札幌』が開催されます！

NWM in 札幌は2017年9月16日(土)～17日(日)に支笏湖ユースホステルで開催。

参加希望やお問い合わせはカトリック全道青年会へお気軽にご一報下さい。

■お問い合わせ カトリック全道青年会 メール：33nwm.sapporo@gmail.com

LINE：カトリック全道青年会 @aag8545x

■NWM(ネットワークミーティング)とは、

全国のカトリックの青年が、情報交換と交流を目的とした集いです。

2001年から開催されているNWMは、現在、半年に1度、各教区が持ち回りで開催し、約100名以上の青年が集まっています。最近では、札幌教区からも10人前後の青年が参加し、東京、四国、鹿児島：と全国へ飛び回り、交流を拡げています。

そして、2017年にNWMが札幌教区で開催されることになりました。開催は9月16・17日、場所は支笏湖ユースホステルで行われます。

7年ぶりの札幌教区開催に向けて、月に数回、青年たちで集まり、会議を重ねています。これまで参加してきたNWMで感じたことや、出会った人たちが、これから出会う人たちのことを思いながら、私たち札幌教区らしさを出せるNWMを目指して、札幌教区の青年の未来に繋がるように、実りある時間に出来たらと、日々励んでいます。

■前回NWM報告■

2016年2月27日(土)～28日(日)で第30回NWM in 四国 2016「めぐ

るー人生という巡礼の旅」というテーマの元、110名程の青年が各地より集まりました。札幌教区からは10名の青年が参加し、2月28日～29日の「カトリック青年連絡協議会※」にも出席してきました。(※各教区代表の会議)
参加した青年の3名からの感想を掲載し教区の皆様へのご報告にかえさせていただきます。

—NWM感想—
①円山教会所属

山田康平

私は、今回のネットワークミーティングが初参加でした。

今回のプログラムでは分かち合いよりは、公演や体験の方に重きを置いていたと感じました。



個人的にはグループで打ちあひをし、全国の参加者と交流を深めることを期待して、企画者側で深めていったことを参加者に発信することに疑問を持っていました。しかし、交流会で「自分達の教区は最初は人数が少なく、ネットワークミーティングを開催することも難しかったけれど、こうして沢山の仲間を支えられて計画を立ててきて、感じてきたことをみんなに伝えなかった。高松教区をみんなに知ってもらいたかった。」と聞いて、ネットワークミーティングではこういうやり方もあり、それが情報交換でもあることを知り、納得しました。

また、私が今まで関わってきた練成会では、主に分かちあひを目的としていたので、青年活動ではもっと幅広いことができることに期待を持ちました。

ネットワークミーティングの目的は「情報交換と交流」であり、その両方を経験できて満足して札幌に帰りました。

最後になりますがとても充実したNWMに行かせてもらいありがとうございます。

③北26条教会所属 武川こむぎ

今回のネットワークミーティングのテーマは「めぐる」。

四国八十八か所巡りと掛け合わせた、カトリックのイベントとしては型破りなテーマに少しの不安と、それ以上の期待を持ち、私は初参加のネットワークミーティングに臨みました。全体の人数が多いため個人と個人での分かちあひはあまりできませんでしたが、スタートの皆さんが「めぐる」について図形を用いて講話をしてくださったたり、「88ヶ所めぐり」と題し、実際に外を歩きながら各所をめぐりお話を聞いたり、やはり日常ではできない体験ができました。

その中で私の印象に残ったのが「経験率」のお話でした。私たちは日々多くのことを体験しますが、その体験をどれだけ自分自身の成長へと繋がる経験へ変えられるか、というものです。ここ数年、私は自分の視野や可能性を広げようと様々なことに飛び込んでチャレンジするように心がけていました。しかし、経験率の話聞き、もしかしたら私

は体験ばかりに気を取られ、そこから経験に繋げることを疎かにしていたのではと考え、このままでは勿体ないと思い直しました。

私はこのネットワークミーティングで多くのことを体験しました。そのことをただの体験で終わらせるのではなく、きちんと成長に繋がる経験へと変え、そしてそこで得たことを札幌教区での活動に繋げていきたいと思っています。ネットワークミーティングに参加したことにより、自分の教区にいるだけではわからないことがたくさんあるのだとわかりました。教区ごとに悩みが違ったり、逆に悩みが似ているところもあること。その上で、自分の思いが通じずモヤモヤしたりイライラしたり、ぶつかってしまったたり。でもぶつかってしまったのは、それぞれが真剣に悩んでいるからであって。全国にはこんなにもたくさん熱い思いを持った青年がいるのだということを目の当たりにし、驚きとともに嬉しく思いました。私たち札幌教区の青年も今はまだ微力ですが、芯を持って活動を続けられればこれからきっと仲間が増えていき、その仲間と分かちあひ気持ちを繋げて、札幌教区を支えていきたいです。青年になっていきたいです。

②旭川6条教会所属 佐藤和哉

今回初めてという事で緊張しながらの参加となりましたが、前回とかに参加した人達がたくさん話をふってくれて楽しく話しかけられました。

またいつか参加出来ることがあればやってもらったことを伝えていく事が出来れば良いと思います。

2016年ワールドユースデー クラクラ大会に参加して

2016年7月23日から8月5日にかけて、2016年ワールドユースデー(以下WYD)がポーランドのクラクラで開催されました。札幌教区からは10人の青年と2人の同伴司祭が参加した。大会最後の閉会ミサには300万人の人々が教皇フランシスコ司式のミサに与った。同伴司祭の一人である佐藤謙一神父の感想をお聞きした。

わたしが2016年ワールドユースデーに参加することになった理由は、フィリップ神父と一緒に行ってほしいという強い要望によるものです。一人では大変だと思っていたのですが、WYDの申し込み締め切りはわたしの司祭叙階前の4月18日でしたから助祭として申し込み、司祭として参加することになりました。

実際にポーランドに行ってみるとプログラムが満載で息抜きをする暇がないくらいでした。歓迎会やコンサート、市内の教会を案内してくれたりしてもらったりして、とても楽しい時を



札幌教区の参加者(一部)

礼することができました。一番つらかったのは、本大会初日に日本語学校の生徒のボランティアをお願いしなかつたので、帰り方が分からず、結局ホームステイ先に着いたのが午前0時を回っていた時です。何とか市内のインフォメーションセンターにたどり着き、帰り方を聞いて満員のバスに乗って帰ることができました。午後からずっと歩きっぱなしで疲れていましたからホッとすることができました。次の日からは日本語学校の生徒のガイドで街を歩くことにして早い時間で22時、遅くとも0時前には帰ることができるようになりました。初日の苦労があるのでこんな時間でも全然平気になりました。

グループで一緒に歩いているときにほかの国の若者と会話したり、物々交換したりするのが楽しかったです。日本の国旗を持っていましたから、日本人だと分かると思うのですが、いろいろなものを交換しました。カトリックの中では日本人信者は非常に少数ですが、興味をもつて近づいてきます。わたしたちからすればカトリックの信仰を持つ人たちがこんなにいるのかと逆に驚きます。彼らからすれば、めったに会えない日本人の信者に出会えて喜んでいるのかもしれない。

ポーランドではいろいろな巡礼地をめぐりました。が、やはり一番と言えるのはアウシュビッツでしょう。戦争中の出来事とはいえ何百万人も人が殺されたところに立つというのは本当にいろんなことを考えさせられます。自分がユダヤ人の立場だったらどうかとか、ドイツ人の立場だったらどうかとか、ポーランド人の立場だったらどうかとか考えていました。結論は出ないことですが、イエス様の生き方にならうわたしたちキリスト者がどのよう

に行動すべきかわかるはずですが、それを若者も感じて考えて、そして行動するようになってくれると思います。

最後に今回の巡礼の旅で感じたことを述べます。若者は本物を見せることでわかってくれるし行動してくれそうです。そして、自分が受けたものや感じたものをほかの人、特に自分たちの後輩に伝えたくて仕方がなくなるのです。いつも若者どう接していこうか悩む時があります。あんまり反応がないとか、つまらなそうにしている若者を前にしてわたし自身無力感を感じることもあります。しかし、世界の多くの若者とともに過ごす中で、日本の若者も信仰とは何か、イエスが伝えたことは何かを肌で感じてくれたのではないかと思います。彼らが日本に帰ってから生き生きとしていて、その教会の皆さんは感じていてと思います。WYDを通して本物の信仰を得て帰ってきた若者たちを温かく迎えてください。そしてまた次の大会で他の若者たちも大きく成長することを楽しみにしながら、3年後のパナマでのWYDを待ちたいと思います。

■カリタスジャパンセミナーの案内■

「子どもが生きる力」を守る ～2017年10月21日(土) 藤女子大学で映画と講演会～

2016年9月より2019年3月までカリタスジャパン啓発部会委員をお引き受けすることになりました。「カリタスジャパン」と聞くと、国際カリタスの一員として、貧困や戦争等で苦しむ人々への支援を行う国外支援機関というイメージが湧きますが、一方では日本国内において、人権やいのちを脅かされている人々の状況、それに関わる問題や社会的課題に向き合い、研修会やセミナーの開催、小冊子の発行、メッセージの発信などを通して、課題の共有や理解の促進を進める活動も行っています。前者は「援助部会」、後者は「啓発部会」がその役割を担っています。

啓発部会は2008年より「自死と孤立」というテーマで、講演会や公開勉強会、カトリック教会における自死についての意識調査、小冊子「自死の現実を見つめて」の発行、日韓合同シンポジウム、「いのち支え合う」連続セミナーなど積極的に活動を展開してきました。2016年9月からはこの流れを引き継ぎ、自死と孤立の背景に潜む社会の「排除」思考に着目し、「排除のない多様性社会をめざして」というテーマで取り組むこととなりました。

今後啓発部会はこのテーマのもとに、様々な活動を展開する計画ですが、その第一弾として所謂「こどもの貧困」に着目し、映画と講演会を全国3か所で開催することとなりました。「日雇い労働者の街」と呼ばれてきた大阪市西成区釜ヶ崎で38年にわたり、子どもたちの憩いの場として活動を続ける「こどもの里」に密着したドキュメンタリー映画「さとにきたらええやん」の上映、そして「こどもの里」の生みの親である荘保共子さんの講演会『「子どもが生きる力」を守る』を通して「排除のない多様性社会」を共に考えてみませんか。入場無料ですが、事前に申し込みが必要です。各教会に送られるチラシをご覧ください。



■申し込み・問い合わせ先：カリタス家庭支援センター 011-261-2188

カリタスジャパン啓発部会委員（カリタス家庭支援センター長） 菊地秀治

カトリック札幌司教区 ハラスメント対応デスクが始動

「年度内にホットライン開設に向け準備進む」

2002年1月、アメリカのポストンで聖職者による子どもへの性虐待事件が報道され、歴代教皇による取り組みを経て、教皇フランシスコは教皇庁に「児童を守るための委員会」を設立し、全世界の司教協議会に対し、子どもに対する教会のメンバーの責任について明確に意識できるように、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設定するよう指示されました。

全世界の司教協議会と共にこの問題に真摯に取り組んできた日本の司教団は、2017年、四旬節・第二

金曜日を「性虐待被害者のための祈りと償いの日」と定め、各教区において司教の呼びかけに従って、被害者の痛み・苦しみに寄り添い、祈りと償いのうちに過ごすことを求めました。

札幌教区では、既に勝谷太治司教の年頭書簡でも触れているように聖職者によるセクシユアル・ハラスメントに対応するしくみ作りを進めてきましたが、この

度6月1日付で対応デスク担当者として、西千津（難民移動移住者委員会・うえるかむはうす担当、菊地秀治（カリタス家庭センター長）を任命、その名称を「カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスク」としました。デスクでは聖職者によるセクシユアル・ハラスメントの他、パワーカー・ハラスメント等も取り扱う予定で、2017年度内にホットライン（電話相談）開設をめざし準備を進めています。

去る6月に開催された全道司祭大会では、教区で働く司祭に担当者紹介と共に札幌教区での準備状況が報告されました。その後、カトリック中央協議会の子どもと女性の権利擁護のためのデスク担当であるSr.石川

治子氏（聖心侍女修道会）による司祭に向けた研修が行われ、参加司祭は熱心に耳を傾けていました。札幌教区では、今後担当者が道内各地に出向き、信徒向けに啓発活動を行う予定です。

障がいと共に歩む札幌大会

「障がいと共に歩む札幌大会」に約500人の参加者（主催…カトリック札幌司教区・障がいと共に歩む札幌大会実行委員会）



3年かけて準備を進めてきた、日本カトリック障害者連絡協議会（以下「カ障連」・第12回全国大会「障がいと共に歩む札幌大会」の主の食卓に招かれた者は幸い招かれていた喜び）が、2015年8月22日、

23日、札幌市の藤女子大学を会場に、全国から492人が集い盛大に開催されました。大会の応援サポーター43人を併せると535名にも及びます。一日目の基調講演は、「浦

河べてるの家」理事・向谷地生良氏が「病気の力・幻聴さんいらっしやい」と題して当事者4人と共に登壇。病気の力を活かした「べてるの家」でのユニークな取り組みが紹介され、会場は一気になごやかに。その後の分科会は10テーマ29グループに分かれ、それぞれの想いを活発に意見交換しました。懇親会ではサポーターから全国の参加者への歌のプレゼントが披露され、「アーメンハレルヤ+神様といつも一緒」が参加者全員の大合唱となりました。二日目の全体会では代表として10グループから分かち合いの報告をしていただきました。最後に大会のクライマックスであるミサが開祭。勝谷司教様と全国から集まった11人の司祭によるミサで参加者の心は一つになり、感謝と喜びのうちに主の食卓を囲みました（カトリック新聞2015年9月6日第4305号、障がいと共に歩む札幌大会実行委員会発行の「大会速報ニュース」参照）。

全参加者492人のうち、一般参加者は313人、

障がいのある方が、交通機関を利用する場合、障害者割引が適用されるものの、付添の方の交通費は、その全額を障がい者本人が負担しなければならないなど、健常者が考える以上に

サポーターは179人。また、カトリック信徒は450名で、遠くは鹿児島、長崎、福岡教区など全国16教区中、12教区からの参加（札幌教区285人、本州教区165人）でした。障がい申告のあった参加者は144人（29・3％）で、障がいの内訳は、肢体41人（車椅子11人）、視覚21人、聴覚26人、内部7人、知的18人、精神38人、発達8人、その他5人。前回の名古屋大会参加者414名、障がい者参加数116名を上回る結果となりましたが、その背景には、大会のポスターと要項を4月上旬に全国のカトリック教会932ヶ所へ一斉発送したことが挙げられます。また、全国のハンセン病療養所等13ヶ所にも同様に発送、実行委員会オプザーバーの平中氏も各療養所を訪問し積極的にハンセン病当事者・関係者の方々へ参加を呼びかけたところ、今回初めてハンセン病当事者の参加が実現しました。

障がいの多い方が、交通機関を利用する場合、障害者割引が適用されるものの、付添の方の交通費は、その全額を障がい者本人が負担しなければならないなど、健常者が考える以上に

費用負担は大きなものです。そこでカ障連全国大会では、障がい者もつと気軽に参加していただけるよう、障がい者本人及び付添の方に交通費補助を行っています。障がいと共に歩む札幌大会実行委員会では、3年前から教区内で寄付を募り、札幌教区及び全国から寄せられた寄付3、451、340円が参加者交通費補助に充当されました。大会へ思いを寄せてくださった多くの方々に紙面をお借りして心より感謝申し上げます。

当初の予想をはるかに超える参加者数のため、第二会場を設け、多くのサポーターはビデオ放映による参加となるなど、予定通りに進まない事態もありましたが、大きな混乱や事故もなく、そして何よりも参加者全員が喜びに満ちた笑顔で大会を終えることができた





教区の風

先日、ある一冊の本を開いてみた。読み進めるうちに夢中になって読み切ってしまった。その本は『日本の教会の宣教の光と影』という本である。

2000年の大聖年にあたり、東京教区で「キリシタン時代からの日本の宣教のあり方を考える」というシンポジウムが3回にわたって行われた。この本はその講演録をまとめたものである。その目的は何かというと、「過去のことを称賛しがちな教会側の歴史観に立つのではなく、できるだけ教会側の歴史観に立っていない歴史学者たちの資料をも参考にしながら、影の部分にも光を当て」、「ただ過去を美化するのではなく、逆にまた否定するもの

でもなく、何を歴史の遺産として受け継ぎ、今何を乗り越えなければならぬかを明確にして、新しい世紀を迎える教会の発展を考えたい」ということである。新しい世紀に入ってから17年がたつが、2000年当時議論されていたことがどれだけ解決されているのだろうか。

この本の最後に『日本のカトリック教会共同体の構造的欠陥(?) について』という講演録がある。森司教はそのなかで次のように述べている。

「宣教師たちの努力によって、1941年には、16教区となり、教区長たちは全員邦人になりましたが、それぞれの教区は、教区としての機能を果たすための人材も、財政的な裏付けもない、教区としての実体をともなわない、名ばかり

のものであったことは、隠しようのない事実です。」

「こうした状況の中で、福音宣教活動を展開したいというさまざまな男子修道会や宣教会の申し出は、人材面でも財政面でも困窮している教区長にとっては、非常にありがたいことであつたに違いありません。教区長は、その申し出を喜んで受け入れ、教区内の地域の宣教司牧活動を委託していくことになるわけですが、それは、教区長が実質的に介入できない状態に道を開くことにもつながっていきます。」

「信者数の少ない日本の教会は、それぞれつながりのないままに、それぞれが独自の活動を行うというような状態をこれまでずっと引きずってきたということになります。(これを、修

道会の数と比較的少なく、教区長の方針を核にして、信徒も男女修道会も結束して地域の宣教司牧にあつてきた韓国の教会の状態と比較してみることも、面白いテーマになるのではないかと思います。)

「こうした分団(断)化、分散化を避けるために求められることは、司教たちの強烈な方針・ビジョンです。キリストの共同体として、それぞれのもてる力を合わせてまとめるための旗は、地域共同体の要としての司教のビジョン・方針以外に、私は考えられません。」

「日本のカトリック教会共同体の根っこにある大きな問題の一つは、力を結集するための司教たちのビジョンの欠如である」と私は考えております。この点で、司教団の一員として、私の

力不足も、ここで心からお詫言ひたいとおもいます。17年経過した今、状況は少し変わってきたと思う。修道会と宣教会の司祭の減少と高齢化が著しい。徐々に教区に派遣することが難しくなっている。教区司祭も少なくなってきた。司祭が不足するとうつなるといふと、一人の司祭が複数の教会を担当することになる。必然的に集会祭儀が増え、信徒が中心となつていかざるを得ない。あるいはそれぞれの教会が一緒になって合同ミサを行うことになり、信徒の交流が深まる。それによって「自分の教会」というよりも「地域みんなの教会」という意識が高まる。信徒同士の交流が深まれば教会の統廃合を考えやすくなる。少しずつ教会が変わっていく感じが現れてきている。(K)

新刊図書を紹介

教皇フランシスコの使徒的勧告 『愛のよろこび』

カトリック中央協議会刊

2017年8月30日発行
2、160円(税込)



社会の急激な変化や極度の個人主義の台頭により危機的状況にある「家庭」。

その真の価値を再認識し、種々の困難の中にある家庭を励まし支えるには教会はどうあるべきかを、過去の姿勢への反省も踏まえて考察し、示唆している。

三位一体の聖エリザベ

『56の泉のまなざし』

ドン・ボスコ社刊

2017年4月発行
810円(税込)



2016年10月に列聖された三位一体の聖エリザベットの26年の生涯と、彼女が残した折々の言葉集。生涯をかけて心の深みに住ま

われる神とともに生きたエリザベットが、自身の体験をもとに「神のいのちの泉」の愛の豊かさを賛美する。

『21世紀への司教団メッセージ』として2001年に発行された『いのちへのまなざし』に大幅な改訂を加え、第二章以降を全面的に書き改めた「増補新版」。

混迷を続ける現代社会の中



「時のしるし」を見極め、いのちの尊厳といのちのさまたげをめぐり、重なるよう変わることなく訴えていく、新たな司教団メッセージ

新司教館 建設が進む

2017年5月から新司教館(地下1階地上4階)建設が始まり、7月末現在で地下部分の配筋・コンクリート打設工事がほぼ完了している。予定通りの進捗状況で、8月中旬から鉄骨建方が始まり、来年1月末の完成を予定しています。

新司教館建設資金のご寄付のお願い

勝谷司教は、既に文書でお願いしていますが、新司教館建築のための寄付を募っています。

7月31日現在の寄付額は61件 87,497,728円。

寄付金の目標は一億円とされていますが、新司教館の建築には、自己資金として約2億円が必要であり、教区財産の取り崩しを少しでも軽減するため、一億円以上の皆さんのご寄付をお願いしています。

【寄付金振込口座】

- 北洋銀行苗穂支店
- 普通預金 3232695
- 宗教法人
- カトリック札幌司教区

訃報

※亡くなられた方々の神様のみもとの安息をお祈りください

■フランシスコ修道会

▽ヨハネ・マリア・ヴィアンネ 菊池勝神父



2015年11月27日午前9時30分入院先の天使病院にて急性心不全のため神様の下に召されました。修道会修練長や管区書記などを歴任なさいました。享年86歳

【略歴】

1929年12月24日 名寄市生まれ

1958年3月26日 初誓願

1965年3月19日 司祭叙階

2015年3月19日 金祝

2015年11月27日 帰天



▽ロンデロ・カリシモ神父

入院加療中の病院で、退院間近だったのが、容態が急変し12月18日午前11時頃神様の下に召されました。享年84歳

【略歴】

1932年7月27日 イタリア生まれ。出生地の教会にて受洗

1949年9月12日 初誓願

1955年1月23日 終生誓願

1956年6月24日 司祭叙階

1959年9月13日 来日し、釧路の新川教会

などの釧路地区の教会、北見地区の教会で司牧

2016年12月18日 帰天

■殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▽Sr. Mアスンプタ 小田原幸子



62年間の修道生活を送り、9月28日の夜に花川マリア院で突然神様ののもとに召されました。初誓願の後、帯広、網走、小樽の幼稚園で務め、1961年の甲状腺腫瘍の手術後も札幌マリア院で加療しながら

も、体調の許す限り学校の事務や購買、クラブ活動の建物管理などを行って来ました。ここにこしながら忍耐強く病苦を捧げ自分の奉献生活の使命としていたとの事です。享年86歳

【略歴】

1929年1月5日 生まれ

1949年8月14日 受洗

1953年3月23日 入会

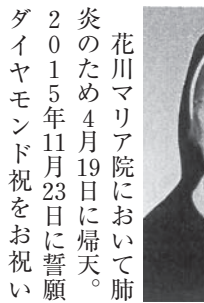
1956年1月11日 初誓願

1961年9月23日 終生誓願

2005年11月23日 誓願金祝

2015年9月28日 帰天

▽Sr. Mアスンチアータ 伊藤喜美



花川マリア院において肺炎のため4月19日に帰天。2015年11月23日に誓願ダイヤモンド祝をお祝いし、4月12日に誕生日をお祝いたばかりで、神様の下に召されました。享年88歳

【略歴】

1928年4月12日 生まれ

1950年5月27日 受洗

1953年9月12日 入会

1956年8月11日 初誓願

1961年9月23日 終生誓願

2005年11月23日 誓願金祝

2015年11月23日 誓願ダイヤモンド祝

2016年4月19日 帰天

■マリアの宣教者フランシスコ修道会

▽Sr. フランシスカ龍瀬敏子

札幌修道院所属で、10月20日午後10時50分肺炎のため神様の下に召されました。長年、助産師として病院の使徒職に携わりました。享年85歳

【略歴】

1931年8月26日 三重県鈴鹿市生まれ

1965年3月19日 入会

1973年9月17日 終生誓願

2016年10月20日 帰天

■聖ベネディクト女子修道院

▽Sr. ルチア金澤美智子

11月3日午前11時40分入院先の病院で神様の下に召されました。享年76歳

【略歴】

1940年9月17日 室蘭市生まれ

1960年12月24日 受洗

1965年4月1日 入会

1969年2月10日 初誓願

2016年11月3日 帰天

編集後記



発行に間が空き申し訳ございませんでした。およそ2年ぶりの教区ニュース発行にこぎつけました。これからも定期的に発行していきたいと考えていますが、それには編集に携わる者の努力のみならず、札幌教区のみ皆さんの文章による協力が不可欠なものとなります。

さて昨年、教区百周年の節目を迎えて、これまでの百年の宣教を振り返りました。これからの百年何かを始めなければ、何も残らないかもしれません。札幌教区も残っていないかもしれません。すくなくても動き出しましょう。

(編集子)